

塾講師 児童養護施設に

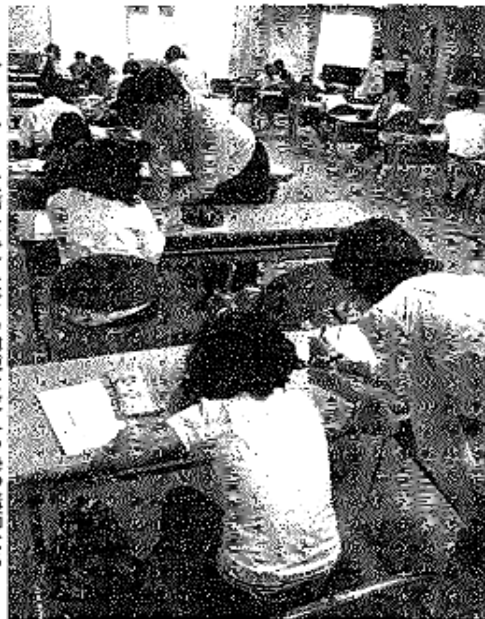
都内大手がボランティア

立川市の児童養護施設「至誠学園」で、都内の大手進学塾「ena」(学究社)のプロ講師が1月から、学習ボランティア活動を行っている。ユニークな試みだが、施設出身者の大学進学を後押しするには、経済的な公的支援の拡充が欠かせない。

(大津和夫)

同園には、毎週木曜午後5時半に同塾の講師4〜5人が訪問し、1時間半にわたり、小中学生約20人の指導にあたっている。学力に応じて教材を用意し、教えた内容や授業の様子などを記録している。

子どもと面談も行い、学と話す。



ひとりひとりに声をかけながら勉強を教える塾の講師たち

親から満足に食事も与えられないなど、勉強どころではなかった環境で育った子どもも少なくないが、塾の指導を通して、成績が上がり、顔つきが変わってきた子どもが出てきたという。

同園統括学園長の高橋利一・法政大名教授は「ブローの支援は珍しいことで、ありがたい話。様々な問題を抱える子どもが学習意欲を高める機会を早い段階でつくることは、将来につながる」と話す。

同園では大学生の団体もボランティアで学習支援しており、寄付金などの援助を受け、毎年10人程度の高卒者のうち3、4人が大学や短大に進んでいる。だが、都全体で見れば、

施設出身者が大学に進むケースはごくわずかだ。施設などの出身者を対象に、都

が2011年8月にまとめた調査によると、最終学歴が大学卒(短大含む)の割合は6.6%。都全体の大

01201785811
立川駅南口 徒歩3分

になっており、大学を卒業するには、学費に加え、生活費も4年分必要になる。施設などから支援を受けられる人は限られ、「学力や意欲はあっても、断念する子が多い」と、ある施設職員は言う。一部援助を受けて進学したとしても、アルバイトに追われ、中退するケースも後を絶たない。

約10年間、施設の子どもの自立支援を行っているNPO法人「エンジェルサポートセンター」(立川市)の高橋利之理事長は「家庭の事情で高等教育の機会が限られることは、国の損失。民間団体には支援に限りもあり、奨学金の拡充など、公的な支援の強化が必要」と指摘する。